

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目次

- フランクフルト・ブックフェア2004所感1
- IFLA 2004年総会に出席して2
- 計報・総務委員会から・会員の動き3
- 委員会報告4
- 出版文化史逍遙(92) 洋書の歴史雑記帳〔XLVII〕...5

フランクフルト・ブックフェア2004 所感

稀に見る厳重警備のもと、「フランクフルト・ブックフェア2004」が開催されました。2001年の米国同時多発テロ以降、会場入口での荷物チェックは導入済みですが、今年は招待国がアラブ諸国だったこともあって殊更厳重な警戒体制が敷かれていたようです。オープニングではシュレーダー独首相がスピーチを行い、異文化相互理解の促進という観点からこのフェアに期待を寄せる旨コメントがありました。ブックフェア事務局の意図－書籍、映像ほか各種メディアを通じてイスラム理解を促す機会を提供する－は、参加者各方面に正しく汲まれ、全体的に成功裡に終わったものと評価されています。

事務局発表の数字を見ますと、出展社数は110カ国から6,691社、入場者数は288,887名でいずれもほぼ前年並み。ドイツ国内出版社やビジュアル系、コミック系出版社など、一般読者対象のエリアは今年も賑わいを見せていました。一方、我々の関心事であるビジネス客の入場者数は185,465名。利用したタクシーの運転手からは、今年は利用客（つまりビジネス客）が随分少ないとの指摘があり、出版社のコメントを総合しても、残念ながら参加者実数の減少傾向は見られるようです。因みにBookseller誌（10月15日号）フラン



クフルト関連記事の表題は、「Quiet, but quality; Frankfurt 2004」としています。英米を中心とした International Publishers 棟である Hall 8.0 はその傾向が顕著、との指摘が聞かれますが、出版社としては、重要市場である米国のブック・エキスポや北京ブックフェア、それに近年 international な商談の場として好評のロンドン・ブックフェアの魅力がより高まり、派遣人数を調整することでコストを分散させているものと思われます。また、東京国際ブックフェアに関する引き合いが多かったことも、この文脈で考えられそうです。

さて私は、会期前日に STM コンフェレンスに出席して参りました。昨年は取次 RoweCom の破産に伴う債務処理問題などが話し合われましたが、今年はほぼ終日 Open Access がテーマとなり、英国科学技術委員会メンバーの下院議員がキーノート・スピーカーとして招かれました。加えて、出版社側代表としてテスト・モデルをリリースしている Springer、利用者側からはロンドン・シティ大学研究グループのプレゼンがあり、白熱した質疑応答で相当な盛り上がりを見せていました。「感情的」とも評された発言もあり、Open Access というテーマが出版業界や学術研究市場に与



え得る潜在的なインパクトの大きさを改めて感じます。既にオンライン・ジャーナル（コンテンツ）が、取引、商談の柱となり、収益構造含めて大変革期にある業界ですが、Open Accessの考え方はさらに革命的で、直ぐにとはいえないものの議論の行方を注視する必要がありますと痛感します。出版社側にも著者側にも賛否両論ありますが、利用者利益を実現しながら収益を確保する、書店やエージェントのチャレンジは続きます。

書籍、特に学術書に目を転じますと、（ここ数年ずっとそうですが）世界的な学術市場予算の縮小、オンライン・コンテンツへのシフトといった状況下、各社とも企業努力を続けています。商品構成そのものを見直し実務書商品群の構築に軸足を移したり、為替差損を避けるべく決済通貨を変更したり。リストラの一環としてアウトソースを進めたり、あるいは単純に値上げを断行したり…今年は派手な買収・合併の発表こそありませんでしたが、収益重視の改革が進められている様子が伺えます。対日本市場については、設備投資や株価など一般的経済状況に明るさが点り、実際、数次的には最悪期を乗り越えた出版社も多いようですが、そうはいっても不況脱却の実態は主に対米中輸出依存型。楽観は禁物という状況で、消費者心理は完全



復活と到底言えず、また何と言っても大学・教育市場の大変革の只中にあるということで、出版社には、注意深くかつ前向きに、堅実な成長戦略を描く対話と努力を続けようと話しています。まだまだチャレンジングな状況です。

業界、市場を取り巻く環境は、出版社、我々協会員、そしてお客様と、それぞれに相当厳しいものと認識しています。そのようななかで今年もまた、最適なソリューションを求めて会場を駆け回りました。皆様もそれぞれの商売のタネを蒔いてきたことと思います。フランクフルト・ブックフェアの意義再考、他国ブックフェアを絡めた位置付け等、重く受け止め議論せねばなりません、大事な商機に突入する秋口、業界ほぼ全てのプレイヤーが集結するこの機会はやはり貴重な情報源であり、それは即ち利益の源だと考えます。

来年は第57回。韓国を招待国として10月19日～23日まで開催されます。それこそ商機を考えると、もう少し早く開催されればよいのですが。

丸善株式会社 ロンドン出張所
讀井裕二



IFLA 2004年総会に出席して

2004年度のIFLA〔International Federation of Library Associations〕総会が地球の反対側のアルゼンチンのブエノスアイレス市で、8月21日より28日迄開催されました。今年度で、70回目を迎えるこの会議は、世界各国より約3,000名の参加者を迎え、市

内のヒルトンホテルを中心に、総会、各セッション、ワークショップ、展示、レセプションなど多士済々で、とても一人で全体像を把握することは不可能でした。IFLAは世界各国の公共図書館、学校図書館、専門図書館、医学図書館などの連合体を国際レベルで連携さ

せる機関で、いわば図書館の国連と云ってよいでしょう。通常IFLA総会の出席者総数は5,000～6,000名と云われていますが、今回は非常に遠隔の地にあるアルゼンチンのブエノスアイレス市で開催されたため、ヨーロッパや北米、アジアからの出席者数は約3,000名にとどまりました。地域別で見ますと、中南米と北米が圧倒的に多く、日本からはIFLAの窓口となっている国会図書館から5名のメンバーを加え、主として私立大学図書館のメンバーを中心に20名程の参加がありました。

会議出席の目的は、一人ひとりが異なっており、従って、会場の各セッションでの行動はNDLのメンバーを除いてはバラバラでした。IFLAの活動目的の範囲が多岐に亘っているため、他の図書館会議とは異なり焦点が絞りにくいという難点がありました。私の立場としては、当社にとって関心のある製品や市場を見ることが、なかでも最大の関心事はオープンアクセスであったと考えます。事実、各セッションでもこのテーマが採りあげられ、また、大手STM系の出版社や取次店であるELSEVIER、THOMSON、KLUWER、SWETS、EBSCOなどがIFLA会議のスポンサーである以上、スピーカー、出席者、展示業者からもオープンアクセスが共通の関心事であったことは事実です。インターネットの登場で我々の住む世界は日々刻々と変化し続けており、情報の世界、図書館の世界は特に変化のスピードが著しく、オープンアクセスや著作権

のようなホットな分野の進歩のスピードに我々は遅れをとる訳にはいきません。同時に従来の出版社、取次店、図書館の銘々の役割に大きな変化が起こりつつあることも認識していく必要があります。事実、今回IFLAの総会のホットなテーマとして、出版社、取次店、図書館はそれぞれが協調を通じて次の時代に入っていかなければならないということが会議の中で強調されていました。先般、JAIPセミナーでASAのRollo Turner氏がSubscription AgentsからIntermediariesへの変身を求めておられましたが、私達外雑業者にとっても、この変化は新しいビジネスチャンスであるという捉え方をする必要があります。

来年度のIFLA総会は、ノルウェーのオスロで開催されます。明後年は、お隣の韓国ソウルで開催されます。そのためかアジアからの出席者は韓国が一番多く、次に中国のメンバーが多かったようです。

情報化、国際化のスピードが早まる今日にあって、私達の洋書業界も他の国々の業界に合わせて変貌していかないと、世界から、そしてアジアの各国からも取り残されていくのではないかと、ある意味での恐怖感を持ったことも事実です。

なお、このIFLA大会のプログラムをご希望の方は弊社までお申出ください。

ユサコ株式会社 山川隆司
(協会ホームページから転載)

訃 報

アメリカ大学出版局グループの元日本代表、石神 幸宏氏が9月27日ご逝去されました。享年67歳でした。

謹んでお悔やみ申し上げます。氏の長年にわたる業界への功績に感謝いたします。

総務委員会から

この度、協会のイメージアップのためにロゴを作成することになりました。広く会員の皆様から募集いたします。詳細は決まり次第別途ご連絡致します。

会 員 の 動 き

会社名及び代表者変更

会社名

新：株式会社ウォルターズ・クルワー・ヘルス・ジャパン

旧：株式会社エル・ダブリュ・ダブリュ・医学書院

代表取締役

新任：マーク・シュレガーダス（営業部門担当）
中澤由紀子（管理部門担当）

退任：太田之憲

異動日：2004年9月

第114回 72会ゴルフコンペ

2004年3月13日（土）会場：狭山ゴルフクラブ 天候 晴れ 参加者：16名（12社）

<成績表>

		グロス	ハンデ	ネット
優勝	山本明彦（日新）	92	20	72
2位	鶴 竜次（東亜ブック）	85	5	80
3位	村田誠四郎（丸善）	104	23	81
4位	山川隆司（ユサコ）	92	9	83
5位	西山幸児（西山洋書）	89	5	84

ベストグロ	鶴 竜次（東亜ブック）	85
ドラコン	山本明彦 西山幸児	
	松浦拓己 和田 茂	

ニヤビン 山本明彦 山川隆司
中林三十三 佐藤市郎
東亜ブック 鶴 竜次



JAIP釣り同好会 アジ釣り大会

JAIP釣り大会が、9月18日（土曜）久里浜港大正丸で開催されました。今回の対象魚はアジです。

『釣れるかな…』『いっぱい釣れたら良いな…』乗船して船が釣り場に向かう時、誰もが期待で一杯です。

『始めてください』船頭さんの声。一斉に仕掛けを海底へ。ますます期待感で胸が膨らむ一瞬です。その後、『来たよ』『大きいぞ』の声が、あっちこっちから挙がるはずだったが…。

たまに釣れるのは、サバ（それも小振り）ばかり。本命のアジは何処にいるやら、姿を見せない。そして、船中最初の鰯を釣り上げたのは、UPSのマークさん。それも、開始から2時間以上たった、10時過ぎでした。誰かに一匹上がると、自分にも、釣れそうな気がして来ます。ビンにコマを詰め直し、仕掛けを再投入。ちょっぴり期待をしながら…。

しかし…、今日のアジは可愛く無い。口を使ってくれません。全員苦戦、そして不満。船頭さんも何とか釣らせようと、船をあっちに移動、こっちに移動。

そんな中昼過ぎ頃から、一匹、二匹、忘れた頃に本命が顔を出すようになったが、もう時間がありません。『終了』の声が掛かった時に、本命のアジは船中19匹（11名）でした。

釣れない時は、本当に釣れない。反対に釣れる時は『こんなに釣れて良いの?』と言いたくなるほど釣れる。釣りってそういうものなんです。釣果はお魚さんしだいということです。

入賞者は以下のとおりです。こんな悪条件の中で結果をだされた三方に、敬意！

優勝	伊藤 啓	三友社	5匹
2位	広瀬洋子	大洋交易	4匹
3位	川原美幸	三友社	3匹
	（敬称略）		

大洋交易 広瀬敏昭 記

洋書の歴史雑記帳〔XLVII〕ドイツ学術受容の歴史(10) 鈴木陽二

◆ケンペルの来日 (3)

ケンペルの『鎖国論』が鎖国政策を擁護する内容だったこともあって、為政者や学者の間でしばしば幕府の対外政策に対する支持や批判の論拠に使われた。幕末までその翻訳書が写本で普及し、多くの知識人が閲覧する機会を得てその内容を吸収・利用した。今回はケンペルの著作の翻訳を追って見ることにしたい。

『鎖国論』は『日本誌』の第4巻第5章の翻訳で、そもそもは『廻国奇観』の一部をなす文章だったのが、『日本誌』の英語版が編纂されたときに訳編者によって組み込まれた。日本での『鎖国論』の翻訳は、その蘭訳版からの部分訳だった。

『鎖国論』は、1801(享和元年)にオランダ通詞志筑忠雄によって訳されたもので、「鎖国」という言葉は、彼の造語だった。この訳は、幕府の政策を正当化している内容だったにもかかわらず出版することができず、幾つも写本が作られて流布した。1808(文化5年)には幕府天文方の高橋景保が幕命で翻訳を手掛け、『西客堅協鹿日本記事第四編抄訳』(『蕃賊排擯訳説』)を著した。彼は後年シーボルト事件の重犯として処刑された。『鎖国論』はその後、1850(嘉永3年)に本居宜長の学統を受けた国学者黒沢翁満が志筑訳を『異人恐怖伝』という書名で出版したがすぐに発禁の処分を受け、明治22年にいたってようやく刊行された。

『日本誌』自体の翻訳の試みは、先ず、和歌山藩士の武部遊が藩主徳川治宝の命で『日本誌』に含まれている図版とその説明だけをまとめて『新訳大西洋譜欠爾假検夫爾之日本誌図解』(5冊)という題で1813(文化10年)に訳了し、続いて1837(天保3年)に本文の第1巻第1章～第4章を『日本紀事訳解』(7冊)という書名で出版した。1837(天保3年)には田原藩主の一族三宅友信がシャム旅行の部分だけを訳して『西洋人検夫兄日本誌附暹羅記』を著した。弘化年間には幕府司天台翻訳局で箕作阮甫、杉田成卿、竹内玄同、宇田川興斎、高須松亭など高名な蘭学者が共同で完訳し、幕府の紅葉山文庫に収められた。初めての全訳だったが、幕末に散逸してしまってその書名も伝わっていないという。蘭学者の坪井信良が修史局の委嘱を受けて、明治13年に『検夫爾日本誌』として訳了したのが現存する唯一の完訳稿となった。

江戸時代『鎖国論』は遂に出版されなかったが、写本で実に多くの人に読まれた。ひとわたり記すと、蜀山人太田南畝は1805(文化2年)に長崎で志筑訳の原本を閲読して『読鎖国論』という漢文の序文を著して志筑忠雄に贈った。平田篤胤は『古道大意』でケンペルを強く肯定し、また1850(嘉永3年)に吉田松陰が平戸を訪れたとき松浦の書庫で『日本誌』を見て、彼の『西遊日記』に必読の書と記した。横井小楠は『読鎖国論』で批判的な論を展開している。これ以外にも閲読したり写本を所蔵した著名人には、幕府老中の松平定信、伊沢蘭軒、滝沢馬琴、本田利明、伴友信、勝海舟などが知られている。特に松平定信は本書を極めて重要な文献と認識していたようで、必読書の一つとして挙げている。『国書総目録』や『古典籍総合目録』には40種を超える写本がリストされているが、失われた写本も数多くあったと思われ、普及の広さが理解できる。ともあれ、これら江戸時代を代表する思想家や為政者が読んでいたということは、本書が多かれ少なかれ日本の進路に影響を与えたことは当然であろう。

次にこの『日本誌』は、ヨーロッパでも大きな反響を呼んだが、紙数の関係で列挙するに止める。『日本誌』は日本を紹介した最初の本格的な文献だったと言うばかりではなく、ケンペルの日本観や思想がヨーロッパの学者に好意的に理解され、ヨーロッパ文明の批評の材料としてポジティブに受容された。例えば、イギリスの小説家オリバー・ゴールドスミス、フランスの思想家ダルジャンス、ドイツの詩人クラウディウス、などがそれぞれ論文やエッセー、フィクションなどでケンペルから得た日本の姿を題材に作品を執筆している。また、モンテスキューの『法の精神』、ヴォルテールの『諸国風俗論』、さらにレッシング、カント、ルソー、マルサスなどの知識人は『日本誌』を読んで、日本の社会相・政治の形をヨーロッパの模範と評している。ヴォルテールの日本観はそのままディドロの『百家全書』の「日本」の項に用いられ、ディドロ自身は「日本人」の項でケンペルを引用している。〔参考文献：小堀桂一郎『鎖国の思想―ケンペルの世界史的使命』／ヨーゼフ・クライナー『ケンペルのみた日本』／沼田次郎「ケンペル『日本誌』の日本および海外における影響」〕 (元丸善・本の図書館長)



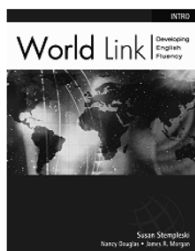
トムソンラーニング 新刊案内



Go for It! Second Edition

Level: 1 ~ 4

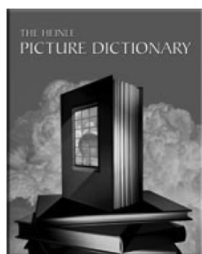
本体価格 各 1,750 円 (税込価格 各 1,837 円)



World Link

Level: Intro, 1 ~ 3

本体価格 各 2,400 円 (税込価格 各 2,520 円)



The Heinle Picture Dictionary

本体価格 2,200 円 (税込価格 2,310 円)



日本出版貿易株式会社

本社(国内営業一部営業一課) 〒101-0064 東京都千代田区猿楽町1-2-1

Tel: 03-3292-3755 Fax: 03-3292-8766 E-mail: bksale@jptco.co.jp

大阪営業所 Tel: 06-6886-7176 Fax: 06-6886-7131 九州営業所 Tel: 092-651-3785 Fax: 092-651-1191

URL: <http://www.jptco.co.jp>

WEB サイトでの在庫検索・発注 <http://yosho.jptco.co.jp> (事前の申込が必要)